

# ハイスクールD×D 半妖の赤龍帝

緋蓮

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

もしも、犬夜叉の力を持った転生者が赤龍帝としてハイスクールD×Dの世界に転生したらという物語。

駄文&処女作でおもしろくないと思います。さらにこれは作者の自己満足でかいている部分もあります。それでもいい人はどうぞ。

# 目次

原作前

プロローグ

1話

1

4



## 原作前

## プロローグ

目覚めるとそこは一面白い空間が広がっていた。

「ふあゝ…ん？どこだここ？」

確か俺は家で漫画を読んでははずだけど…

「それにこの場所ってよく二次小説とかであるテンプレ的な空間だからもしかして転生の間とかそんな感じか？」

まさかそんなことないよな？」

「その通りでございませう!!」

後ろから声が聞こえたので振り返ってみるとそこには白いローブを身にまとった金髪の女性がいた

「ようこそ転生の間へ！私は転生を担当する神のソーンといいます。この度私たちの暇つゝ暇つぶしのために特別に誰かを転生させることになり、結果見事あなたが選ばれました。」

「まじで転生の間だったの!? てことは俺死んだの!? それと暇つぶしって言い直そう

としてそのまま言い切ったよこの人!」

ソーンと名乗った女性は現れてからすぐに自分にとって信じられないような事を言ってきた

「ま、そんなことはおいといて説明に入るよ」

「そんなことって…とりあえず話を聞かか」

「素直で何より。まず私たち神の間で娯楽が最近なくなってきたいてそんなときに最高神様が『久しぶりに人を転生でもさせるか』といったので丁度土砂崩れで死んだあなたを転生させることになりました」

まじか！ そういやよく思い出してみると漫画を読んでいるときに大きな音がきこえてたな

「わかった。本当は信じたくないけど心当りはあるし実際に起きてる事だから信じるよ」

「ありがとうございます。転生してもらおう世界はハイスクールD×Dという世界になります」

「ハイスクールD×D? それってどんな世界なんだ?」

「簡単にいうと天使や悪魔、墮天使にドラゴンなどの人ではない種族が多く存在する世界です」

それってかなり危険な世界なんじゃないかな…

あまりすぐに死んでしまうような世界はいやだなあ

「特典とかつてあるんですか？」

「もちろんありますよ。3つまでいいですよ」

「それじゃ

1つ目としてあらゆる限界や成長率を自由に設定出来るようにする能力。

2つ目として環境などを自由に設定出来るように出来る自分だけの空間。

3つ目として俺が好き犬夜叉にでてくる鉄碎牙と天生牙、爆碎牙の3本の妖刀と妖怪としての力をコントロールできるようにした犬夜叉にすること。あと新月のときに人間になるデメリットもなしにしてくれ。」

「分かったよ。それじゃ転生させるね」

ソーンがそういうと地面に魔方陣のようなものが展開されてその瞬間意識がだんだんと遠くなっていき

「第2の人生私たちが楽しめるように頑張つてね」

その言葉を最後に意識を失った。

# 1話

「う〜ん……こは？」

再び意識が戻ると見たことのない部屋で寝ていた。周りを見てみると家具が置いてあり机の上に手紙がおいてあった。

「なんだろこの手紙。神様からかな？」

やっほ〜！

この手紙を読んでもるってことは無事転生できたってことだね！特典で言われた通りにした体にしてるから後で確認しておいてね。1つ目と2つ目に感しては念じればウィンドがでてきて設定できるようにしてあるからそれも確認しておいてね。刀も念じればでてくるようにしてあるよ。今は15歳ということにしてるから1週間後に駒王学園という高校に入学してもらいます。サービスとして家とお金、戸籍とかその他にもいろいろ用意しておいたから大丈夫だよ。2枚目の紙の空欄に名前をかけばそれがあなたの名前になるから。楽しんでね！

ソーンより



「名前かあ、どんな感じのにしようかな」

どうせなら犬夜叉関係のにしたいな〜と考えて

「よし!かごめと犬夜叉と犬夜叉のお父さんからとって日暮闘夜(ひぐらし　とうや)にしよう」

と名前を決めた。すると

「キュ〜」

「誰だ!?!」

突然声が聞こえたので声がしたほうに振り返った。するとそこには尾が複数あり、赤い目をもった子猫がいた。子猫は闘夜が振り返るとその胸に飛びついてきた。

「つて、こいつつて雲母(きむら)?!」

「キュ〜♪」

そこにいたのは犬夜叉の原作で出てきていた猫又の雲母であった。

「何で雲母がここにいるんだ?もしかしてこれが神様の手紙に書いてあったサービスの1つなのかな?取りあえずよろしくな雲母」

「キュ〜♪」

闘夜がそう言うと雲母は嬉しそうにないた。

「よし！能力の確認もしたいし、訓練でもするか」

鬨夜は早速特典の1つである異空間へと移動して訓練を開始した。

「ここが特典で頼んだ異空間か。取りあえず設定は時間の流れは精神と時の部屋と同じにして年の取り方は外の世界と同じにしておこうかな」

異空間の設定をしたあとはまず最初に軽い運動をして身体能力について確認した。

「うおっ！すっげえ、前世と比べると全然違う。よし次は刀の方を確認するか。こい、鉄砕牙！」

鬨夜が言った瞬間右手に刀が現れた。それをひきぬくと抜刀する前と違って大きな刃をもった大刀となった。

「これが鉄砕牙か。でもどうやって技を放てるだろ？確か風の傷は刀身で妖力とかの力のぶつかり合ってる境目をきることだっけ？でも俺はそこまでの力はまだないし…取りあえずありきたりだけどそれらに関する設定を変えてから座禅でもするか」

鬨夜は座禅を組み、自分の内側に意識を向けて深くまで探ろうと集中し出した。その状態がしばらく続くといきなり声が聞こえてき。

『ほう、今度の宿主は神器が発現してない状態で俺の方から声をかけてないにもかかわらず自力でこの場所までできたか』

「ここはどこだ!? それにお前はだれだ! 見た目からしてドラゴンか?」

『その通りだ。俺はお前に宿る神器である「赤龍帝の籠手」に封印されているドラゴンで「赤い龍（ウエルシユ・ドラゴン）」と呼ばれた赤龍帝ドライブだ』

声が出たので目を向けるとそこには赤い色をした巨大な龍がいた。

「ドライブっていうのか。よろしくな。それよりもいくつか質問いいか?」

『ああ、いいぞ』

「神器ってなんだ? なんでドライブはそれに封印されているんだ? そしてどうして俺にそんなのが宿ってるんだ?」

『ああ、それは…』

---

ドライブ 説明中

---

というわけだ』

「なるほど…」

闘夜はドライブより天使や悪魔、墮天使の三大勢力についてや神器について、そして自分についてなどを説明してもらった。

『それにしても今代の相棒が半妖だとはな。しかも歴代と比べても才能は最高クラス。』

今回は俺の勝ちだな』

「…なあ、ドライグ」

『なんだ？相棒？』

「二天龍の因縁については分かった。だから頼みがある。」

『頼み？』

「強くなりたいたいんだ。でもおれ一人だと限界があるかもしれない。だからこそ俺を鍛えてくれないか？」

鬨夜は一人で手探り状態で訓練するよりも大昔から戦い続けてきたドライグによって鍛えられたほうが効率がいいと考えドライグに頼み込んだ。

『いいだろう。俺も相棒には白いのに負けてほしくないしな』

「ありがとう！ドライグ！」

その後、ドライグに手伝ってもらいながら訓練を開始した。